

2026. 6. 1

# 現代俳句千葉

161号

巻頭エッセイ

## 夏目漱石『草枕』に見る俳諧式目 幹事 藤好良



漱石の『草枕』を最近読み直してみました。画家がぶらりと温泉の旅に出た際のさまざまにスケッチ風の旅行記とばかり思っていました。たが、とんでもありませんでした。どうやら明治後期の日本が大陸に進出した頃の温泉地で起こった人の別れを描いた反戦小説のようです。またこの『草枕』には、小説家夏目漱石が何故死ぬまで俳句を作り続けたかの秘密も隠されています。どうやら漱石は連句などに利用された俳諧式目を大いに利用しつつ、この小説を構成したのでしよう。では『草枕』の全十三章を覗いてみましょう。

俳諧式目とは、連歌や俳諧の方式や規定のことです。その項目には「春・夏・秋・冬・新年・恋・旅・釈教・述懐・山類・水辺・居所・降り物・そびき物・動物・植物・人倫・芸能・食物・月・夢など」があります。漱石はどうやらこの式目を小説の構成に活用したようです。一々四章「山路を登りながら考えた」で始まる小説「草枕」は、ある画家が温泉宿を訪ねる所から始まります。途中から雨に変わり、峠

### 目次

夏目漱石『草枕』に見る俳諧式目	
藤好良	1
令和八年度定期総会	2～3
令和八年度席題俳句大会	4
諸家近詠	5～6
私の感銘句	6～7
会員・会友の近況	7
春の吟行会	8～9
研究句会報告	10
(津田沼・青葉・柏・君津・いすみ安房)	
強化部だより・お知らせ	11
山崎聰先生を悼む	
帰らぬ人へ	渡辺 澄 12
揭示板	12

千葉県現代俳句協会会報

の茶屋を経て那古井の宿へ。湯に入り、宿の娘那美さんと出会います。五々九章 宿の周辺を歩くと画家が居ます。床屋へ。また湯へ。宿の主人と茶会へ、此処で観海寺の和尚大徹と那美のいとこ久一さんと出会います。久一さんは間もなく大陸に徴兵されます。十々十二章 画家はやはり宿周辺を歩き回っています。鏡が池へ。観海寺へ。山へ、此処で那美さんの元夫・野武士風男が那美さんと共に現れます(野武士も大陸に渡るため那美さんに金を無心にしたのです)。十三章 戦地に向かう久一さんを見送りに、宿から吉田の駅へ船で向かう一行。ラストシーン、那美さんは駅で久一さんと野武士を見送ることになります。哀しい別れです。式目分類してみました。私なりに分類してみると以下のようなになります。(一)内が式目です。画家(芸能)、山路(山類)、雨(降り物)、那古井(居所)、温泉(水辺)、床屋(芸能)、居所(芸能)、鏡が池(水辺、旅)、観海寺・和尚大徹(釈教)、駅(旅)、那美さんと野武士の出会いと別れ(恋)等。こう見えてくると『草枕』は俳諧式目の塊と言えます。漱石が如何に子規との友情を大切にされたのかも判る気がします。

## 令和八年度 定期総会・席題俳句大会開催される

令和八年三月二十二日（日）、千葉市民会館にて令和八年度定期総会・席題俳句大会が開催された。

定期総会は、石井稔幹事長の総合司会のもと、十二時に開会。高橋宗司副会長の開会のことば。羽村美和子会長の挨拶に続き、鈴木卯ノ花氏を議長に選出。総会は会員参加二十八名、委任状一三九名、定数を満たし成立した。総会では五議案について審議され、全ての議案を可決。木之下みゆき副会長の閉会のことばで終了した。

（東 國人記）



顧問の皆様 左より  
秋尾 敏・渡辺 澄・高木一恵・徳吉洋二郎



議長 鈴木卯ノ花さん



羽村美和子 会長

写真：遠藤寛子・石井 稔

### 〔第1号議案〕

#### 令和7年度事業報告

##### 1. 行 事

###### (1) 定期総会・席題句会

- ① 令和7年度総会 3月16日（日） 出席者 38名  
会場：千葉市民会館
- ② 俳句大会 10月12日（日） 参加者 81名  
創立45周年記念俳句大会 会場：千葉市文化センター  
顕彰 事前投句の部 応募数 1625句  
顕彰 高校生の部 応募数 9句  
記念講演 池田澄子氏 演題「三橋敏雄を師として」

###### (2) 吟 行 会

- ① 春の吟行会 4月30日（水） 参加者 40名  
吟行地：谷中界限 会場：本行寺
- ② 秋の吟行会 12月2日（火） 参加者 31名  
吟行地：我孫子界限 会場：我孫子南近隣センター

###### (3) 研究句会

- ① 津田沼研究句会 毎月第2火曜日 13時～16時  
津田沼1丁目町会会館（2句事前投句）12回実施
- ② 青葉研究句会 毎月第4木曜日 13時～16時  
千葉市民会館（3句事前投句）12回実施
- ③ 柏研究句会 毎月第2土曜日 13時～17時  
柏市・ハックルベリー書店2階（7句当日投句）11回実施  
8月は夏休み
- ④ 君津研究句会 毎月第1木曜日 13時～17時  
君津市生涯学習交流センター（3句事前投句）12回実施
- ⑤ いすみ・安房研究句会 奇数月第4日曜日 11時～15時  
勝浦市・藤屋蕎麦店（4句事前投句）6回実施

###### (4) 青年部活動

夏雲システムによる句会（あしたば句会）  
1月26日、3月30日、7月27日、9月28日  
吟行会 6月7日（堀切菖蒲園）、12月14日（柴又界限）

###### (5) 初心者講座（第3期）

4月19日開講 年10回（年度内8回済）会場：千葉市民会館

##### 2. 幹事会等

###### 定例幹事会

- 第1回 1月21日（火） 船橋市勤労市民センター  
第2回 5月20日（火） 同上  
第3回 8月19日（火） 同上  
第4回 11月18日（火） 同上  
臨時幹事会 4月1日（火） 同上

##### 3. 会報の発行

- 第156号（3月1日刊）  
第157号（6月1日刊）  
第158号（9月1日刊）  
第159号（12月1日刊）

##### 4. 会員数等（令和7年12月31日現在）

会員 222名 会友 38名 計 260名

###### 【主な異動】

###### \* 入 会 7名

新会員（5名）久野真喜恵 池之端モルト 百瀬 一禰  
寺田 寺彦 小藤真由美

転入会員（1名）石井ひさ子

新会友（1名）置鮎 勝美

###### \* 退 会 25名（会員 24名 転出会員 0名 会友 1名）

内、物故者 会員 4名

西垣 左京 加藤 法子 八島 岳洋  
袴田 菊子

[第2号・第3号議案]

令和7年度の会計報告

[令和7年1月1日～12月31日]

収入の部

(単位:円、%)

科目	予算額(a)	決算額(b)	対比(b)/(a)	摘要
総会	0	38,000	0%	R.7より席題句会
俳句大会	600,000	851,000	141	
吟行会	100,000	71,523	71	春・秋2回
協会運営	530,000	488,752	92	本部より助成金・会友費他
強化部	60,000	50,000	83	
特別事業費	700,000	776,000	111	45周年俳句大会基金
合計	1,990,000	2,275,275	114	

支出の部

(単位:円、%)

科目	予算額(a)	決算額(b)	対比(b)/(a)	摘要
総会	124,000	120,508	97%	
俳句大会	465,000	670,944	144	チラシ・作品集 高校生の部
吟行会	85,000	43,453	51	春・秋2回
会報発行	576,000	534,465	93	年4回発行
協会運営	205,000	193,405	94	
強化部	54,000	61,680	114	会員増強 青年部
特別事業	600,000	322,328	54	
予備費	100,000	0	0	
合計	2,209,000	1,946,783	88	

次年度繰越金

(単位:円)

当年度収支差額	328,492
前年度繰越金	1,508,641
次年度繰越金	1,837,133

財産目録

(単位:円)

普通預金	1,544,067	千葉銀行稲毛東口支店
現金	293,066	
合計	1,837,133	

監査報告書

令和7年度の会計及び事業の執行状況について監査した結果、すべて証票書類と一致しており、正当に処理されていることを確認しました。

令和8年1月20日

監査役

野口京子

[第4号議案]

令和8年度事業計画(案)

1. 行事

- (1) 定期総会  
令和8年度総会・席題句会 3月22日(日) 千葉市民会館
- (2) 俳句大会  
令和8年度俳句大会 11月1日(日) 千葉市文化センター  
(高校生の部含む)
- (3) 吟行会  
春の吟行会 館山界限 4月30日(木) 菜の花ホール  
秋の吟行会 未定
- (4) 研究句会
  - ① 津田沼研究句会 毎月第2火曜日 13時より  
津田沼1丁目町会会館(2句事前投句方式)
  - ② 青葉研究句会 毎月第4木曜日 13時より  
千葉市民会館(3句事前投句方式)
  - ③ 柏研究句会 毎月第2土曜日 13時より  
柏市ハックルベリー書店(当日投句方式)
  - ④ 君津研究句会 毎月第1木曜日 13時より  
君津市生涯学習交流センター(3句事前投句方式)
  - ⑤ いすみ・安房研究句会 奇数月の第4日曜日 11時30分より  
勝浦藤屋蕎麦店(4句事前投句方式)
- (5) 青年部活動  
夏雲システムによる句会 1月 3月 7月 9月  
(あしたば句会)  
吟行会 5月 11月
- (6) 初心者講座  
第4期 4月11日(土) 開講 年10回 千葉市民会館

2. 幹事会

- 定例幹事会 船橋市勤労市民センター
- 第1回 1月20日(火) 第2回 5月19日(火)
- 第3回 8月18日(火) 第4回 11月17日(火)

3. 会報の発行

- 第160号 (3月1日刊) 第161号 (6月1日刊)
- 第162号 (9月1日刊) 第163号 (12月1日刊)

[第5号議案]

令和8年度予算(案)

[令和8年1月1日～12月31日]

収入の部

(単位:円)

科目	予算額	前年度予算額	前年度決算額	摘要
総会	40,000	0	38,000	席題句会1000円×40人
俳句大会	600,000	600,000	851,000	事前投句料 大会参加費
吟行会	80,000	100,000	71,523	春・秋2回
協会運営	482,000	530,000	488,752	本部助成金 会友費
強化部	50,000	60,000	50,000	初心者講座
創立45周年特別事業費	0	700,000	776,000	基金
合計	1,252,000	1,990,000	2,275,275	

支出の部

(単位:円)

科目	予算額	前年度予算額	前年度決算額	摘要
総会	90,000	124,000	120,508	
俳句大会	466,000	465,000	670,944	チラシ・作品集 高校生の部
吟行会	73,000	85,000	43,453	春・秋2回
会報発行	550,000	576,000	534,465	年4回
協会運営	205,000	205,000	193,405	
強化部	53,000	54,000	61,680	会員増強 青年部 初心者講座
創立45周年特別事業費	0	600,000	322,328	記念式典費
予備費	30,000	100,000	0	
合計	1,467,000	2,209,000	1,946,783	

次年度繰越金

(単位:円)

当年度収支差額	-215,000	-219,000	328,492
前年度繰越金	1,837,133	1,508,641	1,508,641
次年度繰越金	1,622,133	1,289,641	1,837,133

# 令和八年度 席題俳句大会

## 席題「轉り」 「足」

席題俳句大会は、午後二時から、高橋健文副会長の開会のことばで開始された。参加者は、顧問四名を含めて三十五名。披講・点盛・集計と進められ、各特別選者の講評、成績発表・表彰と予定通りに進み、長井寛副会長の閉会のことばで終了した。

大会成績、及び参加者の作品は左記の通り。

(東 國人記)

### へ一位く十五位までの入賞作品

- ① 春の山足裏はいまも原始人 石井 稔
- ② 桜ふむむ赤子の足が泣く準備 遠藤 寛子
- ③ さえずりの真ん中梯子垂れてくる 羽村美和子
- ④ 轉りや密閉出来ぬ空がある 野口 京子
- ⑤ 轉や二軒飛ばしの回覧板 岡田 春人
- ⑥ 十分に働く手足青き踏む 吉田 耕史
- ⑦ 轉と微妙な距離にいるわたし 松本 千花
- ⑧ 地底から轉る如し兵馬備 木之下みゆき
- ⑨ 鳴き足らぬ亀がいるらし万愚節 徳吉洋二郎
- ⑩ 思惟像の足うらを照らす春の月 鈴木 瑩子
- ⑪ 海峡狭し轉は昨日を語り 秋尾 敏
- ⑫ 風信子わたしに足りぬ信仰心 鈴木卯ノ花
- ⑬ 土恋し樹を降りてから二本足 吉岡 一三

- ⑭ 足滑らせてこの世の岸辺夕桜 篠田 京子
- ⑮ 轉りや納骨堂の扉開く 置鮎 隆一

### 特別選者特選句

- (羽村美和子 特選)  
轉りや密閉出来ぬ空がある 野口 京子
- (秋尾 敏 特選)  
猫足の椅子の羽化する春の月 羽村美和子
- (渡辺 澄 特選)  
さえずりの真ん中梯子垂れてくる 羽村美和子
- (高木一恵 特選)  
土恋し樹を降りてから二本足 吉岡 一三
- (徳吉洋二郎 特選)  
轉りや道路工事の穴いくつ 石井 稔
- (高橋健文 特選)  
猫足の椅子の羽化する春の月 羽村美和子
- (高橋宗司 特選)  
海峡狭し轉は昨日を語り 秋尾 敏
- (長井 寛 特選)  
十分に働く手足青き踏む 吉田 耕史
- (木之下みゆき 特選)  
春の山足裏はいまも原始人 石井 稔
- (白木暢子 特選)  
轉りの中や大きな昼の月 高橋 健文
- (石井 稔 特選)  
轉と微妙な距離にいるわたし 松本 千花

### その他の作品

- 富士山を足元に見る春夕焼 渡辺 澄
- 足らざるを知る日月や春愁 高木 一恵
- 平城山は家持泣きし轉りの空 高橋 宗司
- 足柄山に衣たなびく杉の花 長井 寛

轉りやガラスの天井開放す  
 汚すだけ汚せる野良着轉りぬ  
 かくれんば犬の足見え春霞  
 一息の色即是空轉りか  
 足早の花はらはらがドキドキに  
 箱根困難なく通過轉れり  
 初詣で人工骨の足撫でる  
 足袋ぬぎて土の力を花見酒  
 轉や吾が名母の名君は呼ぶ  
 春二番両手両足確かめる  
 龍月足の解き放たれる時  
 轉りの上手になりし裏の山  
 轉りや沈黙も言の葉となり  
 足早に去る背春愁なげつける  
 イランより足裏くすぐる涅槃西風

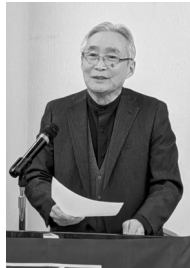
白木 暢子  
 並木 邑人  
 横須賀弘子  
 置鮎 勝美  
 小林 崑七  
 福田志津子  
 小林 昌女  
 高橋 博  
 佐藤 鮎美  
 松村 五月  
 三宅たくみ  
 森須 蘭  
 歌代 美遥  
 石井紀美子  
 東 國人



上位入賞 (左より)  
 羽村美和子会長  
 石井 稔さん  
 遠藤 寛子さん



俳句大会委員長 高橋健文



選評 秋尾 敏 顧問

下村 洋子

霜の花まぼろしの船通り過ぎ  
吊るされて鮫鱈なおも沖を見る  
緑さす翅の音して封書くる  
血の重さゆえにゆったり黒揚羽

高橋 健文

瘡蓋はかさぶたのまま十二月  
児のうつらうつらや唄ひ出す聖樹  
コンビニの夜闇に浮いて大晦日  
付箋貼る雪の降り出したる頁

富田 茂

枝からの雪解け水が煌めいて  
立春のあちらこちらの庭仕事  
下草に負けずに芽吹く松雪草  
鳥の恋光も風も応援す

多胡たかし

妙義嶺は大き衝立二月果つ  
春雷の山覚ましゆくひと転げ  
白鷺の立つ一点のかげりなく  
哲学者然とふくろふ止り木に

鈴木 一行

オリオンの貫禄夜明け前の街  
マスクからかすかな保健室の匂い  
股引を脱皮のように脱ぎすてる  
いたちかも猫かももしかして風かも

坂間 恒子

ブラザー編み機母走らせる夜の底  
白椿こだまひらいているところ  
マネキンの整列している春の坂  
夕顔の闇引き寄せて闇を脱ぐ

鈴木卯ノ花

恋は詩にコキア紅葉は歌声に  
黄葉よ癒えぬ怒りを風にせよ  
細雪フランス人形目を閉じて  
花柄の包みをほどく手毬唄

無 子

本厄終へネスカフェエクスラ鶯餅  
七福神の宴や名刺賜りたく  
戦火くすぶる丸い地球に春何番  
追い風に今季最大級揚羽

戸邊 光一

大枯野一本だけ見ゆ獣道  
大寒波来そう締めきれない蛇口  
寒早昔の村が見える湖  
凍て滝となつて無数の仏見ゆ

寺田 勝子

一つを急いで一つ忘れる小豆粥  
新聞が姿消すとき松花粉  
青鷺の重い一步に子守唄  
冷房に籠る蒟蒻のように

齊木 ギ二

春疾風濡れて短い滑走路  
過去のもの手ばなす東風にだまされて  
原点にもどらぬ光針供養  
花吹雪うけ入れたれば忘れたり

清水 伶

花ミモザふいにモナ・リザの微笑み  
蘆芽ぐむ風の裔なる十二使徒  
残月のかがやくあたり兎罫  
つわぶきも鷹女も好きでわがままで

杉山眞佐子

花あんず白壁へ年端のいかぬ  
木苺を探し当てしは夜の絵本  
銀の鍵細し炎熱攻めあぐむ  
民話から小雪サクセスストーリー

重田 忠雄

献血の出来ぬ年齢蛇苺  
海底に息づく証沖繩忌  
靴ひもを強めに結ぶ終戦忌  
丹念に洗う禿頭終戦忌

澤田 寿一

裸木の空を掴まん仁王像  
穴埋めはどうしたものか藪椿  
老眼のレシビを翳す迎え盆  
焦らずに時の流れを烏瓜

高桑婦美子

サクラ咲く終わりになき世の遊歩道  
舞い散るは花の演出時間帯  
花びらは舞つてサクラの完成型  
散ることが花となる日の無言館

島 隆史

這い這いの未来の吾子へ柿若葉  
飲み放題と筍飯のOB会  
故郷の蜜柑の花のものがたり  
紫陽花と雨が互いを喜ばす

柴田 洋郎

白鳥引く北の故山のなほ北へ  
一条の小流れ残す春の雪  
三月の動かざる雲うごく艦  
九条の海は平らか呼子鳥

諸家近詠

菅ノ谷文子

夜桜や無音好みし時間軸  
病む星の平癒はいつと逃げる水  
花野にはゆらりと進む時のあり  
瞑想す美学求めし秋桜

徳吉洋二郎

残暑いつの日の廃炉かな  
デリートキー打つても撃つても夏  
夏休みティラノサウルス歯を磨く  
落花生剥くいつまでの核の傘

高久 清美

ほどけゆく身の結び目よ青葉風  
秋篠の春塵集め墨作る  
視野なべて金のさざなみ花ミモザ  
蚯蚓鳴く地中に思ひ人ありて

鈴木 瑩子

林檎割純真といえ非対称  
花檮諦めという白い午後  
炎帝や面会室の仕切り板  
雪解水地球剥がれてゆく予約

私の感銘句

橋本志津子

作者名 号頁

河骨や母は手の鳴る方へゆき 下村 洋子 157 8  
雪が雪を被りて能登の音を消す 椎名 鳳人 157 9  
みな降りてくる月光の滑り台 浪岡 玄 158 2  
高階にシフォンケーキを崩し初夏 増田 元子 158 3  
二人づれとは永遠の春景色 渡辺 澄 159 12

晩年という鈍行に乗り隴  
一面の麦秋へひざまずく風  
木之下みゆき 159 13

藤好 良

ミスターは永久にミスター雲の峰  
混沌のリアルとフェイク花ぶぶく  
星野 一恵 158 2  
野馬追いを話す訛りの父よ好き  
中西布美子 158 3  
カンカン帽の斜め人間探求派  
前島きんや 158 3  
手のひらの平和と自由小春風  
置鮎 隆一 159 12  
曲るたび見えて車窓の遠花火  
羽矢 真人 159 12  
律の風わたる無言館に黙礼  
本吉万千子 159 13  
律の風わたる無言館に黙礼  
本吉万千子 159 13

わたるで切り、破調の無季句として読んでみ  
ました。「無言館に黙礼」から前の戦争死者へ  
の敬意が十二分に伝わってきます。そこに律の  
風が吹いてくる構成が見事です。

小野 功

ロボットが春運びくる喫茶店 岡田 春人 156 2  
初蝶のひらひら白紙委任状 清水 伶 157 8  
昭和百年兜太『百年』梅ひらく 高木 一恵 157 9  
引力に諍う静寂青林檎 長井 寛 158 2  
十二月八日廊下のない家に 林 ゆみ 158 2  
退院の妻は客人花芙蓉 土肥 勲 159 12  
晩年という鈍行に乗り隴 前田 孝子 159 13

大見 充子

今日もまた檸檬のような嘘をつき 下村 洋子 157 8  
俳句とふ毒また葉六林男の忌 高橋 健文 157 8  
短詩わが銀河にそよぐしのぶ草 高木 一恵 157 9  
花菖蒲風吹くたびに青いジャズ 羽村美和子 158 2

天病むと詠みし世づく不知火忌 並木 邑人 158 2  
混沌のリアルとフェイク花ぶぶく 星野 一恵 158 3  
さくらさくら兵士ひとりに母一人 渡辺 澄 159 12  
天病むと詠みし世づく不知火忌 並木 邑人

重田 忠雄

「祈るべき天とおもえど天の病む」からか、  
すっかり忘れていた俳句。俳人を思い出し、良  
い俳句は古くならないとつくづく思った。  
空蟬や人は最後に石を買う 東 國人 156 2  
海という大きな墓標沖繩忌 黒澤 雅代 156 2  
初蝶のひらひら白紙委任状 清水 伶 157 8  
風去りて風の残りを抱く牡丹 石井紀美子 157 8  
手のひらの平和と自由小春風 置鮎 隆一 159 12  
明日からを今日からとして水を打つ 羽矢 真人 159 12  
団栗の古里さとがらんと暮しまい 本吉万千子 159 13

高野 春子

ふるさとは見知らぬ土地に盆の月 小野 裕文 156 3  
流水の白き骨もて初焚火 石井紀美子 157 8  
花まんさく夢のあとさき雨降って 清水 伶 157 8  
寺町のゆとりの中を赤とんぼ 澤田 壽一 157 9  
決められぬもの多きよ盂蘭盆会 森須 蘭 158 3  
初めから壊れていたの野分雲 秋尾 敏 159 12  
彫像の体幹確と夏に入る 木之下みゆき 159 13

政成 一行

葱買ひににんげんのごゑ聴きたくて 高野 春子 157 9  
白詰草QRコードに紛れ込む 羽村美和子 158 2  
天病むと詠みし世づく不知火忌 並木 邑人 158 2  
ハンカチに包むきれいなさようなら 松村 五月 158 2

空蟬が知っている私の行方 細根 葉 158 2  
 鱗雲曼は虚空に行き止まる 秋尾 敏 159 12  
 一面の麦秋へひざまずく風 木之下みゆき 159 13  
 天病むと詠みし世つづく不知火忌 並木 邑人

石牟礼道子は「折るべき天とおもえど天の病む」と遣りきれぬ思いの丈を詠んだが、今も変わらない。ミナマタは民と国の在り様、ひいては富と命を問う原点の一つ。掲句はそのミナマタを風化させまいと思いを深める。

菅ノ谷文字

七変化逆立ちしても若返れぬ 金子 未完 156 3  
 雑煮餅世にもねらず逆らはす 高橋 健文 157 8  
 春泥を桂馬跳びして速達来 椎名 鳳人 157 9  
 鬱の字を解体したる残暑かな 徳吉洋二郎 157 9  
 からくりの種をこぼして鳳仙花 中村 冬美 158 2  
 甚平を着て太っ腹と思われる 宮 たかし 158 2  
 冬ざれや人の心に欲しいナビ 大地 節子 159 13  
 冬ざれや人の心に欲しいナビ 大地 節子  
 人は皆生きる過程において、進む方向がわからない時、誤った方向に進みそうな時等、人生においてもナビゲーションがあると、どんなに便利になるかと、同じ思いです。日本も世界も、戦争や惨事が、減ると思います。

興津 恭子

祈りとも臘月夜の遠汽笛 大見 充子 156 2  
 海という大きな墓標沖繩忌 黒澤 雅代 156 2  
 蛇穴を出るや日輪海を脱ぐ 千葉 信子 157 8  
 雪が雪を被りて能登の音を消す 椎名 鳳人 157 9

夕蟬や湖底に沈む村役場 菱木 良一 158 2  
 源流は一つ銀河に合流す 野口 京子 158 2  
 爽涼の白湯にひろがる海の色 倉岡 けい 159 13

多胡たかし

春昼のころのかたち楕円形 黒澤 雅代 156 2  
 ふるさとは見知らぬ土地に盆の月 小野 裕文 156 3  
 雑煮餅世にもねらず逆らはす 高橋 健文 157 8  
 天空に裏道はなし白鳥来 高木 一恵 157 9  
 夕焼けも小焼けも戦後八十年 細根 葉 158 2  
 八月の海静寂のモノトーン 荒木 洋子 159 12  
 横浜を濡らした後の春の虹 安井 三緒 159 12

松本 千花

待ち人は来なくて水を打っている 東 國人 156 2  
 ロボットが春運びくる喫茶店 岡田 春人 156 2  
 寒に入る人にスマホという孤島 尾形ゆきお 156 3  
 徒然のことのお詫びに春が来た 白木 暢子 157 8  
 秋の雨ジムノペディのDマイナー 三宅たくみ 158 2  
 めまといや文士崩れの寺男 中嶋 三雄 158 2  
 初めから壊れていたの野分雲 秋尾 敏 159 12

飯島 昭子

流水の白き骨もて初焚火 石井紀美子 157 8  
 人間を逃げずに草をただ巻る 椎名 鳳人 157 9  
 いつの間の原発回帰残る虫 徳吉洋二郎 157 9  
 穴惑い地球はたつた一つなり 浪岡 玄 158 2  
 病む友へ和紙に滲ます春の色 福田志津子 158 3  
 雑草になり切ることよ三尺寝 置鮎 隆一 159 12  
 親の文読むたびうるむ梅雨の月 菊地 喜己 159 12

《会員・会友の近況》

・俳句は職場俳句会に始まり細々と続けて参りました。昨年卒寿を迎えこれからも楽しんでいきたいと思っています。  
 (多胡たかし)

・月に一回程衝動的にバクチャーが食べたくなります。そんな時は、そごうのペトナム料理店で一人フオーを食べています。  
 (鈴木卯ノ花)

・短歌・俳句・水墨画の主宰誌「あとリエんど」創刊号を六月(年一回)発行予定。人生集大成の余生を楽しんでいます。  
 (無 子)

・毎日家の中においても日本の、世界の情報は、入ってきます。花見という行事参加からは遠くなりましたが。過去の、そして現在の人間の愚かな騒ぎには憤りを覚えています。平安とか平和を願い求めることを忘れた世の行末を、日本の明日を案じております。  
 (高桑婦美子)

・最近、パソコンとスマホを買い替えました。すぐには馴染めず、苦勞しています。昭和の時代を懐かしく思う今日この頃。  
 (島 隆史)

・老々介護も四年目に入り、大分慣れてきた。しかし外出が少なくなり頭で考えただけの理屈っぽい俳句が多くなった。八十五歳の右脳に刺激を・・・  
 (徳吉洋二郎)

## 春の吟行会

## 房総南端の地「館山界限」

会場 菜の花ホール 令和八年四月三十日(木)



渚の駅 たてやま

吟行会当日は、館山駅九時三十五分着の内房線で、館山駅改札前に集合。天気はあいにくの曇天。皆さん館山駅西口より続く真っ直ぐな道を行き、北条海岸に到着。浜辺には浜屋顔が群生して咲いていた。館山湾は穏やかな波で吟行には最適。天気が良いれば、海に向こうに富士山や伊豆半島の雄志が拝めるところだったが、厚い雲に覆われ見ることはできなかつた。湾には、観測船の白い船体や、砂利船の緑色の船体も浮かんでいて、海らし

い景色を形作っていた。砂浜にはたくさん打ち上げられた貝殻や若布、カジメ。古い桧橋には、フジツボがびっしりとついていて、海の豊かさを実感。また、波の動きや音に癒やされる一時であった。

少し歩いたところに、「渚の駅たてやま」があり、一階には、館山おさかな大使を努める「さかなクン」のイラストコーナー、二階には郷土の漁撈用具を収蔵・展示した「渚の博物館」、別棟にはミニ水族館、お土産屋やお食事処もあり、見所満載の場所であった。句会場は、館山駅東口を真っ直ぐに行つたところにある「菜の花ホール」一階研修室にて、十二時三十分受付開始。投句二句を締めきつたのち、長井寛副会長の司会のもと、羽村美和子会長の挨拶にて、吟行会がスタートした。当日の参加者は二十七名。



椰子の樹が並ぶ北条海岸



館山湾を望む

披講、集計、表彰と続き、羽村会長の選評が行われ、帰りに電車の関係で十五時に終了。南房総地域は、遠隔地の上、電車の便も少なく、少し慌ただしい感じであったが、和気藹々とし楽しい吟行会であった。

皆様、遠路はるばる館山まで足をお運びいただきありがとうございます。

披講…石井紀美子・高橋宗司  
写真…石井 稔

(東 國人記)



菜の花ホール  
子供たちの作品

〔一位く十位入賞者作品〕

- ① 蝶になる筈だった貝のつぶやき 石井紀美子
- ② 過去は返す未来は寄せる春の海 白木 暢子
- ③ 春陰や鏡ヶ浦の薄暎 安西 和彦
- ④ 砂に生まれ砂に花咲く海の野ぶどう 高橋 宗司
- ⑤ 波頭には波頭のリズム夏つばめ 高橋 健文
- ⑥ 浜昼顔くすくす笑い遠き戦火 並木 邑人
- ⑦ 遠く来て浜昼顔を好きになる 小川トシ子
- ⑧ 置いたように船ある鏡ヶ浦に初夏 佐藤 禎子
- ⑨ 春棧橋己の陰を突き落とす 東 國人
- ⑩ 曇天を明るくしたり浜昼顔 鈴木 瑩子

〔特別選者特選句〕

- （羽村美和子会長 特選）  
過去は返す未来は寄せる春の海 白木 暢子  
（長井 寛 特選）  
うなばらに兔のはねる卯月かな 高橋 健文  
（高橋健文 特選）  
蝶になる筈だった貝のつぶやき 石井紀美子  
（高橋宗司 特選）  
暗澹と深き沖あり春寒し 吉田 耕史  
（木之下みゆき 特選）  
遠く来て浜昼顔を好きになる 小川トシ子  
（白木暢子 特選）  
流れ着くかじめの減りし里の海 黒川 清和  
（石井 稔 特選）  
浜昼顔くすくす笑い遠き戦火 並木 邑人

〔参加者作品〕

- 夕日棧橋回遊魚空を飛ぶ 羽村美和子
- 沖から夏連絡船がすれ違ふ 木之下みゆき
- 行く春や浜にのこりし波の線 石井 稔
- 天守今掲げる若葉浦の風 池田 勝
- 春の潮騒我が「木屑録」の旅 藤好 良
- 浜昼顔咲き継ぐ浜や波隠し 小林 昌女
- 館山の風にひたりて春惜しむ 野口 京子



披露 高橋 宗司  
石井紀美子



講評 羽村美和子 会長

- 白舟はいやしろに展ぶ浜昼顔 徳田 悠子
- 海岸の会話聞こゆる初夏の風 岡田 春人
- 浜昼顔皆踏まぬよう吟行会 佐藤 鮎美
- 葉桜の空と一葉の息づかい 笹生 君雄
- 菜の花や磨崖仏より臨む海 横須賀弘子
- 安房神社思いは尽きず皇紀元年 林 昭雄
- 乗り合わす友はライバル春吟行 高橋 博

□□津田沼研究句会報告□□

(於：津田沼一丁目町会会館)

●第四〇三回(令和八年三月二十二日)

司会 白木 暢子

絶壁にザイル一本春景色 小林 実  
 黄昏の春の十字路ずっと迷子 羽村美和子  
 春寒の裸電球切れる音 増田 豊子  
 どの街の屋台も滅し野遊びす 並木 邑人  
 医師つひに唇忘る万愚節 高木 一恵  
 古い先の話も倦きて花筏 なかもと淑子  
 竹やぶをたわみたわめり春一番 渡辺しげ子  
 羽ひとつ一期一会の春の津へ 白木 暢子  
 千の葉に万朶の桜四百回 徳吉洋二郎  
 挫折知ることも青春四月くる 星野 一恵  
 未来をさがす春の北斗を見あげつつ 鈴木 瑩子  
 四月馬鹿ウィッグ爪もパープルで 栗原 正子  
 花を愛で人は優しくなる途中 長井 寛  
 野遊や時にはさらりと聞き流す 宮 たかし  
 人力車裏町走る新入生 大喜 京香

□□青葉研究句会報告□□

●第一七一回(令和八年四月二十三日)

土気あすみが丘のホキ美術館へ吟行。

写真絵画鑑賞後、六名参加投句一名の句会  
 場に移動。雨の中、新緑が耀いていた。  
 吟行句  
 裸婦像を見入る男や春の闇 神作 仁子

□□柏研究句会報告□□

(於：柏市「ハックルベリー書店」2階)

●第一五二回(令和八年二月十四日)

司会 長井 寛

下萌や微睡むパスタアンダンテ 野口 京子  
 葱刻む青々喜寿へ向かうべし 木之下みゆき  
 北窓を開けるとマタイ受難曲 松澤 龍一  
 ママを呼ぶポイソプラノあたたかし 小野 功  
 渺々と俳諧自由二日満月 藤好 良  
 棒高跳び虚空におわす春の月 長井 寛  
 人生は選択ばかり探梅行 岡田 春人  
 渚とは砂のゆりかご東風岬 椎名 鳳人  
 雪虫やこれから出会うはずの人 川上 典子

□□君津研究句会報告□□

(於：君津市生涯学習交流センター)

●第七十三回(令和八年四月二日)

司会 長井 寛

ゲルニカとなりし流木春の浜 東 國人  
 不揃いの君ら臍の長い道 石井紀美子  
 自分史の起伏たどれば蜃気楼 前田 孝子

□□いすみ安房研究句会報告□□

(於：和田コミュニティセンター)

●第十三回(令和八年三月二十九日)吟行会

司会 東 國人

九条の海は平らか和田の春 柴田 洋郎  
 シロナガス鯨真白き骨に春日和 徳田 悠子  
 自転車の荷籠かたかた春の浜 鈴木卯ノ花  
 鳥言葉通訳している春帽子 白木 暢子  
 弥生の海青さ白さにひかれる 高橋 宗司  
 水平にあらず海境春の波 長井 寛  
 春の浜砂上に過去という足跡 東 國人

気に入りの皿から割れて弥生尽 越野 雄治  
 春炬燵やさしいひとのそばがいい 北野 耕兵  
 春が行ったり来たりして誕生日 大地 節子  
 影一つ運河に流し春惜しむ 長濱 聰子  
 炬を塞ぐよりの生き方軽くなる 森 孝子  
 人の世の平和希えば木の芽もつ 藤本 嘉満  
 つれづれの春蚕のごときこば食む 長井 寛  
 冬の草引いて大地を揺がせる 村田 満枝  
 蛸蛸出づお主も金釘流にて生きよ 並木 邑人  
 散り椿江戸を向きたる流人墓 山田たかし  
 恋の猫追いつおわれつ神楽坂 徳吉洋二郎  
 臍の夜今だけ私だけのもの 泉 志眞子  
 春夕べ流れを止める信号機 小澤 富子  
 雨の日の外を見ている五月かな 羽矢 眞人  
 流しには忘れられない花の客 佐藤 鮎美  
 声流る受話器の先の桜舞う 古賀としあき

千葉県現代俳句協会青年部活動報告

夏雲ネット句会隔月実施。(次回七月)年二回吟行会実施。(次回六月二十七日)。参加希望の方はご連絡を。六十歳以上は準会員。

kokomiya.2003@yahoo.co.jp (三宅まど)

あしたば吟行会のお知らせ

六月二十七日(土) 十時、京葉線舞浜駅南口集合。デイズニートゾートラインの乗り放題周遊券(七百元)で途中下車しつつ散策。インパークせずリーズナブルにデイズニートゾート気分を満喫しましょう。舞浜イクスピアリでランチ句会予定。ご家族、友人同伴可。当日出欠自由。十四時解散予定。持ち物は筆記用具、ノートやメモ帳、昼食代、交通費。

第十三回あしたば句会(三月開催)

兼題「菜の花・菜花」「昼ごはん」

一人一句抜粋

- 大笑ひして海女小屋の昼ごはん 石井 稔
春深し仕事も飯も同じ席 鈴木卯ノ花
どこにも行けずに灰色の蜜蜂 白木 暢子
絶滅の亭主閑白落とし角 東 國人
菜花摘む初タイミーの青年と 小藤真由美
廃線決まり菜の花の続く午後 無 子
さびしさを内側からと菜の花よ 佐藤 鮎美
定期券学の字消える弥生尽 遠藤 寛子
花曇りカフェで一人の昼ごはん 三宅たくみ
菜の花の前にあつまれ六年生 松本 千花
早春のばびばばぼん・デリング 羽村美和子

シャボン玉フードファイターの昼ごはん 荻野由美子
愛猫のたましい色の椿落つ 森井美恵子
春昼のカーテンオムライスひとつ 陸野 良美

初心者講座 第4期 第一回〜二回

青柳肩こる猫のストレッツ 荻野由美子
シヤチホコの夏空泳ぐ名古屋城 草野 優
五月雨や錆びた音色のオルゴール 佐藤 憲一
春光はすいへいりーべ ぼくは舟 鈴木卯ノ花
春の星瞳に映る自由帳 宮島 唯莉
眠る掌につくし一本置いてゆく 宮原 青佳
銀河系青い地球の花ふぶき 横須賀弘子

初心者講座第四期が四月より始まりました。今期は高校生二名が加わりました。中学時代文芸部で俳句の楽しさを知り、続けてやってみたいとのこと。大人と一緒にどうかなという思いもありましたが、いざ始めてみると良い意味でかき回してくれて、新鮮な刺激を貰い喜んでるところです。

松尾芭蕉の言葉に、「俳諧は三尺の童にさせよ」「初心の句こそたのもしけれ」というのがありますが、これは逆にベテランの人を戒めた言葉です。巧みに作句する人は、ややもすると小手先で作り、心が不在になるということへの警鐘なのです。常に直接の間接の体験を積み重ね、それが濾過された上澄みのような感性の引き出しを増やしたいものです。
フレッシュな仲間を得て、皆張り切っています。途中からの参加も大歓迎です。是非一緒に楽しみましょう！(羽村美和子記)

お知らせ

令和八年度俳句大会作品募集

期日 令和八年十一月一日(日)
会場 千葉市文化センター
(事前投句の部) 新作未発表句に限る
二句一組 千円 何組でも可。

投句締切 令和八年八月三十一日 必着
送り先 〒276-0022 八千代市上高野一三四二-四 白木暢子方

千葉県現代俳句協会 令和八年度俳句大会係(席題の部) 当日席題発表
二句投句 会場整理費 千円
※講演 星野高士先生
※詳細は同封のチラシをご覧ください

第六十三回 現代俳句全国大会 作品募集

締切 令和八年七月三十一日 必着
三句一組 二千元。三句組で五千元
新作未発表句に限る

送り先 〒446-0061 愛知県安城市 新田町小山三二-二十 中村誠一方

現代俳句協会全国大会係

- ◆俳句大会 高校生の部
●応募期間 五月末より九月一日(火)まで
●各高校を通して投句または個人投句も可
●個人投句の場合 高橋宗司宛
〒278-0043 野田市清水五二七-十
TEL 〇四一七二二五-三三三二

### 山崎聰先生を悼む 帰らぬ人へ

渡辺 澄

山崎先生が帰らぬ人となってしまったことが、胸に納まらないうちに、私の兄も旅立ってしまった。今更ながらこの世の無事を思わずにはいられない。

先生はいつも俳句に夢中でありました。『シマフクロウによろしく』をくり返し読むたびにその人間性の豊かさを誇らしく思いつつ、失った無念さは強く心に残っていきます。

哲学者のようであり、少年のようなどころがありました。

「自分の言葉で一回限りの表現を心がけなさい」と教えられ、私は生意気にも「先生はストイックな方ですね」と云いましたら、「そんなこと云われたのははじめてだ。」少し怒ったようなきみしげな表情をしたことを覚えている。

人間の立ち位置が分りにくくなった現在、AIの発する言葉のような、番号のような安易な文章を、どう受けとめてよいか・・・。

先生のその目利きの鋭い考えをお話できる時間が欲しかったと今でも思っている。「人は誰れかのために」そんなふうな人格が形成されていくものだと思ふところがある。千葉へ引越してきて、現俳に入門してから私の知る限り、先生は現俳のため、千葉のため、全力疾走していました。

吟行会も国内外をとわず、旅をさせてくださいました。またお会いしたいものです。

### 掲示板

#### 《会員・会友異動》

#### ●退会

(会員) 菱木良一 寺田寺彦  
中村冬美 橋本志津子  
浜名儀一

(会友) なかもと淑子 本吉万千子  
栗原 正子

#### ●新会員・新会友

本吉万千子 (会員) 羽村美和子 紹介  
栗原 正子 (会員) 徳吉洋二郎 紹介  
池田 勝 (会友) 東 國人紹介  
宇都宮圭子 (会友) 東 國人紹介  
黒川 清和 (会友) 東 國人紹介  
笹生 君雄 (会友) 東 國人紹介  
保泉 漢子 (会友) 東 國人紹介  
安西 和彦 (会友) 東 國人紹介

#### 《令和八年度第二回幹事会》

日時 令和八年五月十九日(火)

場所 船橋市勤労市民センター

#### 議題

- 一、令和八年度総会・席題句会報告
  - 二、令和八年度春の吟行会(報告)
  - 三、秋の吟行会について検討
  - 四、俳句大会(十一月一日)について
  - 五、一般社団法人現代俳句協会(本部)の動向について
  - 六、青年部の活動報告
  - 七、初心者講座について
  - 八、会報一六一号について
- 各研究句会の状況  
(青葉・津田沼・柏・君津・いすみ安房)

九、その他

① 令和八年度後期・令和九年度前期予定について

② 会員・会友動静

③ 次回幹事会 八月十八日(火) 予定

#### □ 事務局・編集部だより □

● 当協会の会長(平成十年より六年間)としてご尽力くださいました山崎聰様が、昨年十二月に逝去されました。

謹んでご冥福をお祈りいたします。

● 子規と漱石が友情を育んだ「愚陀仏庵」が松山に再建、この七月には一般公開されます。

● 館山吟行会では俳句愛好家の地元の皆様方に御参加頂き感謝申し上げます。  
開放的な海と浜屋顔が印象的でした。

現代俳句千葉 第一六一号

令和八年六月一日発行

発行人 千葉県現代俳句協会

会長 羽村 美和子

現代俳句千葉編集部

〒278-0037 野田市野田

六七七-11A二二五

木之下みゆき

千葉県現代俳句協会事務局

〒299-2521 南房総市白子六七三-1

東 國人

TEL 〇四七〇-四六一二九一五

FAX 〇四七〇-四六一三〇七二